〔書　評〕

平山輝男編　『薩南諸島の総合的研究』

上　村　孝　二

平山博士たちが，薩南諸島の言語調査を実施中というううわさを聞いたのは，つい先頃であったが，たちまちその成果が大判の著書となってあらわれた。いつもながらこのような大著は，平山博士の強靱な体力と精神力とを象徴するかのようで，畏敬の念を起こさずにおかない。

本書は平山博士編であるが，地理学・民俗学・言語学の各部門が相提携して総合研究を実施した成果を収録したもので，その内容の構成は次のとおり。

総論　地理的環境　社会環境と生活　言語（以上12ぺ）　第1編　地理的環境（51ぺ）　第2編　社会環境と生活（143ぺ）　第3編　言語（288ぺ）……平山輝男・大島一郎・中本正智　付録　フィルムレコード解説（11ぺ）　総索引（10ぺ）

すなわち言語編は総ページ（509）の3分の2を占めるので，本書の中核は言語である。その他扉を開けると，地図が5枚あり，そのうち言語関係では言語地図と薩南アクセント分布図がある。口絵に調査の記録――話者と生活環境――と題して写真数十枚を飾る。これは博士の前著『琉球方言の総合的研究』と同じ趣向である。

第3編言語の目次は次のとおり。

第1章　アクセント

1.　トカラ列島のアクセント　(1) 三島村の方言　(2) 十島村の方言

2.　屋久島・口永良部島のアクセント

3.　種子島のアクセント

第2章　音韻

1.　トカラ列島・屋久島・種子島　(1) トカラ列島の音韻　(2) 屋久島の音韻　(3) 種子島の音韻

2.　奄美諸島　(1) 与論島の音韻　(2) 沖永良部島の音韻　(3) 奄美大島の音韻

第3章　文法

1.　トカラ列島・屋久島・種子島　(1) トカラ列島の文法　(2) 屋久島の文法　(3) 種子島の文法

2.　奄美諸島　(1) 与論島の文法　(2) 沖永良部島の文法　(3) 奄美大島・徳之島・喜界島の文法

第4章　語彙

言語編の中心は，九州南端から奄美大島に至る間の薩南の島々の方言であって，奄美諸島の方言の方は，特殊な小方言の記述があったり，広い地域にわたる概説風の文法記述があったりするほか，音韻と文法とは調査地点が違うなど，『琉球方言の総合的研究』(以下この本を前著書と略称する) の補遺的性格をもつようである。なお以前の平山博士の論文「トカラ群島・屋久島・種子島の方言」(国語学69集) のなかの文法面の大部分は本書の総論編に，アクセント・音韻面は第3編言語に再録按配されている。

本書の論述態度は全く前著書と同じで，共時態としての体系的研究だ。ときに通時的解釈を加える。音韻の部は音素抽出作業が主。文法は動詞・形容詞の活用体系と代名詞体系の記述にしぼる。第4章語彙　も前著書と同じ共通語語彙 (前著書より50コ？　減) の下に地点は狭義の薩南諸島から多くとり，方言形を配する。アクセント付きで，音声表記に音素表記を併用するのが本書の特色。ぜいたくな第4章で，言語編の総ページの3分の2を占める。

さて，本書の——奄美諸島方言を除く薩南諸島の方言に関する——所論を見て行くことにするが，本書によって教示を受けたところは随所にあり，筆者のこれまでの調査結果が確められた点もはなはだ多い。まず感謝の意を表わさなくてはならない。しかし疑問点や異見がないわけではない。その点を述べて博士の叱正を乞いたいと思う。

総論　言語

この編は奄美諸島を含む薩南諸島方言の概観である。第3編言語への introduction として便利だ。ここでは薩南諸島 (本稿では薩南諸島は奄美諸島を除いていう) の方言特色をうき彫りにするため，奄美諸島方言と鹿児島方言とに言及しつつ記述説明される。音韻に関して，薩南諸島方言の五つの特色があげてあり，いずれも適切。卑見をのべる。(1) に，動詞語尾のル /ru/ に対応する入声音の分布する島々のことをあげ，「薩南諸島の入声音の相は鹿児島本土方言を含め入声音の変化過程をみるに重要なものである」(14ぺ左) は，それはそうであろうが，薩南諸島のル語尾に限っての入声化は，新しい現象であって薩隅本土のそれは，他のキ，ク，チ，ツ等の入声化の影響によって生じたものである。薩隅本土ではル語尾はイ母変化するのが本来の形だと思われるからだ。従って島々のル語尾入声化は本土のそれとは無関係に発生したと思われる。

次に (2) の特色の [ŋ] に関して，「南種子の島間方言などでは破裂音の [g] である。……西之表市と同じすがたである。」(14ぺ右) とは，西表市に関する限り誇張にすぎよう。[ŋ] は稀にあり，ときに [ˆg] で実現されたり，[ˆ] を落としたりして安定をかくことは事実である。次に (4) の特色，「屋久島・種子島方言で [d]→[r] の現象がみられる」(15ぺ右) この [r] の音価は筆者の観察では，種子島の中南部と屋久島の諸地点では (下甑島でも)，本来の [r] とちがい，[d] と [r] の中間音 [r̲] である。[r̲] は舌端を歯茎につけて，やや後方に引く強い破裂音である。[r̲oro] 泥，[ko̲romo] 子ども，[koromo] 衣，[roʃija] ロシヤ…。土着の高年層は，この [r̲] を強い音，[r] の方を弱い音などと称して区別する者がかなりいる。この点について本書は一言もふれてないのは惜しい。(5) の特色は宝島方言の中舌音のことだが，これは第3編のところで卑見をのべる。

次に「奄美方言と他の薩南諸島との特徴的現象」として三つあげ

ているなかに，「2. /p/ /t/ /k/ /r/ /m/ などの子音が語頭以外で拍をなす」(15 ぺ右) 点をあげ，これを鹿児島の入声音や薩南諸島の動詞ル語尾にみる入声音に結びつけ，「入声音化する過程を示すものとして，入声音と同じ現象とみることができる」(15 ぺ右) とある。しかし奄美諸島方言と薩南諸島の方言の共通的特徴としては，甘すぎる見方ではなかろうか。筆者はむしろ /p/ /t/ /k/ /r/ 等は入声音とはちがうもので，閉鎖に破裂を使うことを強調する方がよくはないかと思う。次の「3. 十島村や屋久島にある [ŋ] は奄美方言ではわずかに喜界島にみられる」は，たしかにそうだが，愚見を加えるなら，薩南の島々の音韻現象については，いちおう薩摩半島南端部の方言を顧みる必要がある。[ŋ] もその例で，半島南端部の [ŋ] は，十島村の中之島を中継地にして喜界島の [ŋ] に連絡するのでなく，半島南端部の [ŋ] はそれぞれの二つの方向に分かれて分布したとみるのである。なお [ŋ] の分布と並行しがちの，母音間の [k] [t] の有声化現象が種子島・屋久島・口之島・黒島などの諸方言にごく稀に，かすかにきかれる（この点本書では把握されていない）が，これも薩摩半島南端部と共通的な特徴である。また種子島方言には有声子音の直前の母音が鼻音化する傾向があって，——近ごろ弱まってはいるが——これが半島南端部方言のそれと結びつく。

さらに「他の薩南諸島の方言とくらべたときの奄美諸島の方言のもつ特色をあげる」。その特色の「2. 喉頭音素は /ʔ/ /h/ /'/ の三つの対立である」(15 ぺ右) というに続いて，奄美大島の佐仁方言の [ja:̃] (山) を /'jaᵑa/；与路方言の [kawĩ] (亀) を /kaᵑwi/ と解釈するのは前著書に見られる平山博士独特のものだが，ここでは無くもがなのところ。むしろ十島村以北の方言の /o/ に対して /u/ なる点をあげるべきであろう。それにしても平山解釈に対する服部批判「書評琉球方言の総合的研究」(国語学 74 集) について本書でお答のないのは残念である。

文法面で筆者の調査と違うのは「受ける人」のうち，次のものがある。

(本書)　小瀬田 'ukuNhito　尾之間 'ukuQhito
(上村)　〃 'ukuQhito　〃 'ukuRhito, 'ukuihito

また「他の多くの方言では『起きる』にあたる語は一段活用を示している」(17 ぺ右) は大変なミスで，ラ行五段活用を示しているとすべきだ。「落ちる」も一段でなく下二段活用化するのが普通。「起きる」が下二段化する方言は筆者の調査では，中之島・悪石島・口之島・室島・小室島などトカラ列島中心である。

文法体系の上から奄美諸島方言が，十島村以北の方言とちがう点は動詞・形容詞の終止形の構成であることは周知のとおりだが，その構成に関する平山博士の解釈はすでに前著書にみえ，本書でも要約される (18ぺ)。平山説に賛成する者として，少し感想を加えたい。その所説は例えば，名瀬市の「書く」は kakjuri と kakjuN の二つの終止形がある。kakjuri は kaki (連用形) +'uri (居り) の構成であることは従来の説だが，kakjuN の方は定説がなかったのを，kakjuru (kjuri の連体形) +munu (ものを) の構成だと解釈されるのであって，形容詞の構成も動詞の場合と並行して，「高い」の taksaN は takasaru (takasari の連体形) +munu (ものを) という構成であるとされる。

この解釈から，種子島南部方言で話し手の意志を表わすのに，「書

クモノヲ」という表現法が一時代前に行なわれたことや，種子島だけでなく九州西南部方言では，アッタラシカモン（惜しいことよ），ウーカモン（多いことよ）などの感動の意の終助詞モンが用いられることなどが連想され，いよいよ平山説を支持する次第だ。

なお十島村以北の九州方言の「形容詞カ語尾の形態と奄美諸島方言のK語幹との関係も，互に関連のあるものと思われる」(18ページ右)とあるのは，興味ある問題だが，目下の筆者は九州方言におけるカ語尾形容詞の発生は室町期にあると思い，それ以前のカリ活形容詞はすでに琉球方言に入っていたと想像するので，両者は無関係ではないかと思う。(K語幹とは奄美方言にある～カリ・～カン形容詞終止形などをいう)。

第3編　第1章アクセント

多くの読者は種子島の中種子町・西表市のアクセントが二型アの烙印をおされていることをいぶかるであろう。平山博士の従来の説と違うからである。筆者は数年前中種子町畠田出身の植村雄太朗氏（平山博士の話者）が自分のアクセントは二型アだと告げたので，機会を得て調査してみると，結果は本書と大体同じ。ただ違う点は鹿児島方言のB型にあたる3拍語にあった。

(本書)		(上村)
○●○，○●○▷	otoko，otokoga	○●○，○●●▷
●●○	ma:ta（蒔いた）	●●○（蒔いた）

すなわち○●○型に助詞の付く場合，助詞の直前まで高められるのだ（なお，アサヒ～アサヒガ，イトコ～イトコガ，ハタチ～ハタチニ）。本書でいう西表市の特徴である型を植村氏は発音しているわけだ。おそらく個人差のあることだろう。本書の話者全員が一致して同じ型を示したか疑問である。中種子町内でも地点により，あいまい乃至無アクセントの方言もあるようで，二型アがどの辺まで及ぶか本書でも不明である。筆者が驚いたのは，西表市アクセント（本書では西表市の西表のアクセントを指すのだろう）が二型だということだ。筆者の最近の調査（話者5人）の結果でも，二型を区別する人は一人もいなかった。5人の話者のなかには，平山博士の話者になった2人，柳田桃太郎氏・鮫島宗美氏（鮫島氏は上村幸雄氏のかつての話者で，上村氏にアクセントが無いといわれたという）が含まれる。型の区別のないのはもとより，型意識はひじょうに薄い。5人から集約された型らしいものは，●▷，●○～○●▷，○●○～○●●▷（帆が，穂が，鼻～が・花～が，女～が・男～が）ただし同一人でも気分・はずみなどで，●▷→○▶　○●○→○●●，●○○　○●●▷→○●○▷のように頂点は移動しがち。もちろん高低の差はうすいので平板調である。あいまいアというより無アクセントと呼びたい。いずれにしても種子島アに関する著者の新見は旧説に言及することなく発表され，おまけにアクセント語例が少ないので，読者に不親切なことおびただしい。

次に屋久島尾之間アクセントの，○●，○●▶ hanā，hanaŋa（花，～が），○●●，○●●▶ otoko，otokoŋa（男，～が）(241ページ)はどうだろうか。筆者はこの型は○○▶，○○●，○○○▶型とみて来た。鹿児島アのように急激に上昇しないで，おとなしく頂点に達するのであって，土着人は最後の拍が高まることを意識している。フィルムレコード解説(482～483ページ)を読むと，これらは○●●型に記されたり，○○●型だったりする。例えば，花 hahaŋa，山 jamaŋa，雲 kumoŋa…に対して，海 umiŋa，舟 Funeŋa，声 koeŋa，兎 usaŋi，usaŋiŋa (usaŋiŋa は誤り)，余る amaru，amatta，

深い Fu̥kaka̅, 強い tsujoka̅……。実際レコードに照らしても明瞭に語末が高い例が多い。歩く a:mu̅ (483 ぺ右) は a:mu̅ ときこえる。なお第4章語彙に見る尾之間アクセントとレコード解説との間にも矛盾がある。

	(語　彙)	(レコード)
涼しい	sudzuçi̥ka	sudzuʃi̥ka
白い	ʃijoka̅	ʃiroka̅
深い	Fu̥kaka̅	Fu̥kaka̅
強い	tso:ka̅	tujoka̅

やはり本書でも認めている○○□の方を型とする。そこで語彙編に○○○□, ○○○○のようなアクセント表記の語彙がずいぶんみえるが, 疑問だ。すこし例をあげる。

毎日	me:nitʃi̅	心配	ʃimpai̅	鳥	ka:su̅
正月	ʃoŋŋatsu̅	食物	kuimoɴ̅	蛇	he:bi̅
後	uʃʃo̅	墓	ha:ka̅	喜ぶ	joikobu̅
あそこ	akko̅	道具	ro:gu̅	習う	na:u̅
そちら	sottʃi̅	徳利	tokkui̅	歩く	a:ku̅
どちら	dottʃi̅	櫛	ku:ʃi̅	助ける	tasu̥kuT̅
三十	sandzu:̅	稲妻	inabikai̅	古い	Fu:ka̅
半分	hambuɴ̅	暴風	o:kare̅	痒い	kaika̅
人間	niŋŋeɴ̅	波	na:mi̅	暖かい	nukka̅

これらは, いずれも○○□・○○○□調にきこえるのを誤って全高としたのであろう。やはり○○□・○○○□型とみるべきである。二重母音・[ɴ]・[T] で終わる語は, シンパイ・クイモン・タスクッのようになる。第一アッコ・ソッチ・ドッチ等を全高で発音するなら苦しいではないか。なお筆者の調査では屋久島一湊方言においても長音拍を含む三拍語B型を, クーシ (櫛), カース (烏), ヘービ (蛇), ターツ (立つ), マーク (蒔く) と発音する傾向がある。ただし名詞に助詞が付くと, カースガ, ヘービガのようになる。(この場合山は助詞に移動しない)。また本書にいう中島方言の○●●型は, ○○●型がよいのではなかろうか, 調査不足だが, 筆者のノートには○○□としてある。附言すると, 薩南の島々のアクセント体系の変化過程を示す図表 (243 ぺ) は, 修正を要するにしても見事なもので, 屋久島アが鹿児島アよりも新しいとした卑見は取り下げなければならない。

第2章音韻

「宝島方言の母音体系の特色は中舌として, /ü/ と /ë/ をもっていることである」(254 ぺ左)。この /ü/ は筆者は /i/ と観察している。だから [usü:] (薄い), [marü:] (丸い), [nukü:] (暖い) などは [usï:], [marï:], [nukï:] であって, 奄美諸島の [ï] の音価と同じ。卑見では本書の /ë/ の語例は多く /i/ である。(右は上村)

[dë:neɴ] (来年)	[dï:neɴ]
[kë:] (来い)	同左
[Fë:] (蝿・灰)	[Fï:]
[ototë:] (一昨日)	同左
[nisë:] (青年)	[nisï:]
[jasë:] (野菜)	[jasï:]
[në:] (無い)	[nï:]
[Fu̥të:] (太い)	同左

筆者の調査からは, [ï] は /ui/ /ai/ に対応し, [ë] は /oi/ に対応

すると言えそう。なお例示する。[ī] の例，[samī:] 寒い，[mī:ta] 向いた，[sī:ta] 好いた，[amī] 甘い，[itī:] 痛い，[ʃinpī:] 心配，[nī:ta] 泣いた，[ninībo:] 担棒，[akinī:] 商，[bī:ra] バイラ＝薪用小枝，[takī:] 高い。[ë] の例，[të:da] 研いだ，[kë:da] 漕いだ，例外，[të:Fu:] 台風，[të:noijo] 鯛の魚，[kjo:dë] 兄弟，[dë:koɴ] 大根，ただし後二つは [kjo:di:] [dī:koɴ] という人もある。しかし，本書には報告はないが，小宝島方言では /ai/ /oi/ には常に [ë] で対応している。この方が本来的なもので，宝島方言の /ai/ に対応する [ī] は [ë] より変化したものと思う。宝島方言の自然談話（フィルムレコード）を聴くに音声符号化の wakkë（若い）・wakë（若い）(496 ぺ) と arë:kota:（あらいことは）・harakë:ta（立腹して）(497 ぺ) は筆者の耳には [wakkī] [wakī] [arī:kota:] [harakī:te] のようにひびく。

次に本書は四つ仮名の区別が黒島（三島村）の大里方言にあって，同島の片泊方言では，[dʒi] [dzu] に統合している (249 ぺ右) ことを教える。種子・屋久方言についてはとくに立言はないが，やはり [dʒi] [dzu] で統一的に表記されている。しかし一般に [ʒi] [zu] に統合しているというのが卑見である。この地方はダ行・ザ行音のラ行音化がはげしいので，[dʒi] [dzu] など破擦音の先行を予想しがちであるが，現実の発音は [ʒi] [zu] が常態である。宮之浦方言；[dʒi:]（祖父） [kadʒe]（風） [sidza]（膝） [sudzuʃi̯ka]（涼しい）… (260 ぺ左) など破擦音は無理だと思う。以下ページの処々に再考すべき破擦音記号がみられる。とくに語彙篇のなかで，鹿児島語の語形として，おじ [o͡dʒi]，入墨 [ire͡dzuɴ]，鼠 [ne͡dzuɴ]，雀 [sudzume͡]，肘 [ç͡idʒi]，涼しい [sudzuʃ͡i] などすべて破擦音表記なのは全く頭に来てしまう。

第3章文法

「薩摩半島の方言では，「カ語尾」が多く，大隅半島では，いわゆる「イ語尾」が多いということになっているが，硫黄島方言の様相は，大隅半島の諸方言に近い関係を示していると言える」(280 ぺ左) は，少し注釈が要る。「……に近い関係を示している」は「似ている」という程度で，史的関係はない。硫黄島の住民は薩摩半島南部からの移住者が大部分といわれ，薩摩南部の現状はカ語尾・イ語尾が伯仲しているが，古くはイ語尾が優勢であったことが推定できるから（鹿児島地方は現在もイ語尾優位），硫黄島方言の状態はイ語尾多用の薩南の移住者によって，もたらされたとみられる。

つぎは硫黄島の形容詞の推量形に関して，「takakaQdoE の形もよくあらわれる。これは takaka（高い）に -doE がついた形である」(288 ぺ右) とあるは，誤解であって，この説明は，takakaru という古い連体形に -doE（-roE の薩摩なまり）がついたとすべきだ。よく薩摩地方で好まれる表現法である。なお細かなことを言うと，本書では薩南諸島の動詞の連体形を示すのに一律に「人」という語のつく形をもってしているが，「時」という語がつくと，その形は変わる方言が多い。すなわち，つく語が摩擦音で始まるか，破裂音で始まるかによって違いを生じるので，本書のように終止・連体をまとめて活用形とするのはいよいよあぶないと思われる。

最後に文法面に多い主な誤りを正しておく。下段の方が正しい。

290 ぺ右　ha'jo kake'wa 'jokata

————— 'jokaQta

291 ぺ右　'jo'i'jo takoEnatekuQ（だんだん高くなる）

―――――― (だんだん高くなってくる)

295 ペ左　neNnoE 'rete kake'jo

――― 'irete ―――

〃　〃　――― 'jakusNto'jo (―――だめなのだ)

――― 'jakuseNto'jo ―――

〃　〃　'aNzjoEga kabeba 'o'imo kaku (早く書けばよかった)

(削除。次の文と重複，訳文もあわない)

297 ペ左　(あの人が「書く」と言った)

(あの人が「書ける」と言った)

303 ペ左　(書けけば書ける)

(書けば書けるのだよ)

〃　右　doNdokosaE ―――

koNdokosaE ―――

〃　〃　kamini kaEte soteE haridasaNma'jaE

―――――― haridasaNba'jaE

304 ペ左　kakoEgotaNroE (書いたろう)

―――――― (書きたいよ)

307 ペ左　kakimoso'jo (書きますよ)

kakimoEsoE'jo (書きましょうよ)

〃　右　(書かなくてもよい)

(書かなくてもよいのだよ)

〃　〃　――darede gozaarimoEsuroEkai (――どなたでございますか)

――――――(――どなたでございましょうか)

309 ペ左　――'jamadasaN zjaNroE (――山田さんだろう)

―――――――― (――山田さんだよ)

以上のべ来たったところ，的はずれの妄言の多いことをおそれる。博士の御寛恕をねがうと共に，併せて駿馬に続く大島・中本両氏の歩みの堅実ならんことを祈る。

(昭和44年3月31日　明治書院刊　B5　509ページ　8,000円)

―鹿児島大学教授―